トランスジェンダー女性／男性の子を持つ母親の経験の比較

勝又栄政（立命館大学大学院）

近年、性的マイノリティの社会的認知に伴い、当事者だけでなく、その親に関する研究も増えつつあるが、十分な蓄積がなされているとは言い難い現状である。中でも、トランスジェンダー（以下より TG）の子を持つ親の研究においては事例が限られている（石井 2018; 荘島 2008; 菊地ほか 2019）ことに加え、子（TG 女性／男性）及び親の性差（母親／父親）との関連性については、未だ詳細な検討がなされていない状況である。

TG 当事者に関する先行研究では、TG 男性と TG 女性では、性別違和を自覚する年齢や定職率（真鍋ほか 2000）、当事者に影響を与える他者（佐々木 2017）などに違いがあることが指摘されており、さらに、近年の TG バッシングに関する議論において焦点化されているのは、特に TG 女性である（藤高 2021）。これらの調査結果を踏まえると、TG 女性と TG 男性では、単に割り当てられた性別や希望する移行先の性別に違いが見られるということに留まらず、他者や社会とのかかわり／社会から向けられる眼差しが大きく異なることが読み取れる。以上のような社会状況においては、子どもと密接にかかわり、子どもの性を受け止める側である「親」も、子どもの性差（TG 女性／TG 男性）によって異なる葛藤や課題を抱えている可能性があると考えられる。

そこで、本調査では、「TG 女性／TG 男性の子を持つ母親」へと焦点を絞り、母親の主観的経験から親側の抱える複雑な事情や文脈の理解を行うと同時に、TG の子の性差（TG 女性／TG 男性）による母親の経験の共通点や相違点について明らかにすることを目的とする。（TG の子を持つ親の先行研究では、TG の子とのかかわり方や受け容れには母親と父親で相違があることが明らかにされている。そのため、母親と父親の双方とも検討が必要であると認識しているが、本報告では「母親」にのみ焦点を当て、「父親」の検討結果は別途行う予定である）

調査方法は、生活史調査の手法を用いており、半構造化インタビューを採用した。調査協力者は、TG 女性／TG 男性の子を持つ母親、各 5 名ずつ（合計 10 名）である。

本報告では、まず、TG の子と母親との関係に着目した先行研究の議論をまとめ、たとえば、TG 女性と TG 男性の子を持つ母親では、そもそもコミュニティにアクセスしている（できている）人数に差異が見られている点など、双方の相違点を中心に情報を紹介する。次に、TG 女性／TG 男性それぞれの子を持つ母親の主観的経験について、インタビュー調査の結果を報告する。調査結果では、たとえば、子どもの「治療」に関して、母親が抵抗感を持つことで子どもの性のあり方自体の受け容れに影響を与えていることや、容姿に関する言及の度合いが、TG 女性と TG 男性の子を持つ母親では異なる点などを母親の過去の経験とともに検討する。さらに、母親とパートナー（父親）との関係から、母親が家庭においていかなる役割を担い、それが TG 女性／TG 男性の子との関係にどのような影響をもたらす可能性があるのか、などについて分析した結果を報告する。

参考文献

石井由香理, 2018,『トランスジェンダーと現代社会――多様化する性とあいまいな自己像をもつ人たちの生活世界』明石書店.
荘島幸子, 2008,「トランスジェンダーを生きる当事者と家族――人生イベントの羅生門的語り」『質的心理学研究』7(1): 204-24.
菊地美帆・久保田君枝, 2019,「中学生までの子どもを持つ母親の性同一性障害についての理解とわが子に関する悩み」『GID（性同一性障害）学会雑誌』12(1): 77-86.
真鍋幸嗣・花田雅憲・上石弘, 2000,「性同一性障害患者の性差」『近畿大学医学雑誌』25(2): 165-9.
佐々木掌子, 2017,『トランスジェンダーの心理学――多様な性同一性の発達メカニズムと形成』晃洋書房.
藤高和輝, 2021,「ポストフェミニズムとしてのトランス? ――千田有紀 『〈女〉の境界線を引きなおす』を読み解く」『ジェンダー研究』24: 171-87.

（キーワード：トランスジェンダー、トランスジェンダーの子を持つ親、母子関係）